

VELUX®

# 古民家再生と光



暮らしにあふれる光と風。

いかしの舎・中庭からの外観  
明治から大正にかけてつくられた旧  
家を町のコミュニティー施設に再生。  
右の茶室は八窓庵の写し。

# 古民家再生

周辺に豊富に存在する古民家を  
どう残すかより、どう住み続けていくか。  
そこで6人が集まった。

岡山県に、古民家の再生に取り組む6人の建築家グループがある。  
古民家再生工房。1988年に結成されて以来、現在に至るまで  
共同作品「いかしの舎」をはじめ、個別に数々の再生を手がけてきた。

古民家という「懐かしい」「残していかなければ」という固定観念が  
とかく先行する世の中であって、現代の暮らしに沿う機能性はもちろん、  
実験的な試みを臆することなく盛り込んだ彼らの作品は、  
むしろスーパーモダン、アバンギャルドとさえ言える。  
単なる復元・保存ではない、ひとつの建築手法としての確立をめざす、  
彼らの再生のポキャブラリー。それらは住宅のまったく新しい可能性と、  
後に続く若手建築家への有益なヒントに満ちていた。

# 工房



大角 雄三  
(おおすみ・ゆうぞう)  
1949年岡山県津山市生まれ  
倉敷建築工房大角雄三設計室主宰



神家 昭雄  
(かみや・あきお)  
1953年岡山県岡山市生まれ  
神家昭雄建築研究室主宰



佐藤 隆  
(さとう・たかし)  
1945年岡山県早島町生まれ  
佐藤隆建築研究所主宰



榎村 徹  
(ならむら・とる)  
1947年岡山県倉敷市生まれ  
倉敷建築工房榎村徹設計室主宰



萩原 嘉郎  
(はぎわら・よしろう)  
1947年岡山県倉敷市生まれ  
萩原嘉郎建築事務所主宰



矢吹 昭良  
(やぶき・あきよし)  
1939年岡山県早島町生まれ  
矢吹昭良建築設計事務所主宰

# 日常の風景のなかに民家があった

## Origin

古民家再生工房のメンバーは、普段は個人の設計事務所等で別々に活動しているが、月に一度のペースで定例会を開き、6人が集まって情報交換や建築論を戦わせる場としている。「地方だとしても刺激が少なくなる」というのがその理由だ。今回はその定例会を借りて、工房のこれまでの軌跡を振り返り、現在の個々の到達点を語ってもらった座談会とした。場所は榎村氏の設計事務所、通称「創想舎」の1階サロン。ここもまた、江戸時代の藍染めの納屋を再生した建物である。古民家再生工房のデザインの特色のひとつである“色気”を象徴したような空間の中で、まずは工房の創始者の一人である矢吹氏が口火を切った。

### 発足当時、古民家再生は建築家にとって創造的な仕事ではないと思われていた。何でそんな古くさいことをやるのかと。

…なぜ「古民家」の再生を？

矢吹：これから住宅を手がけていくなかで、日本の風土や景観の問題を考えれば、民家が一番なじむだろうと。周りにたくさんありましたしね。

榎村：古民家というのはだいたい戦前くらいまでに建てられたものを指すのですが、倉敷は震災に遭っていないから、古い民家が今もたくさん残っている。しかも財力のある商家が、京都や大阪から職人を呼んで競い合って建てたような、レベルの高いものが多いんです。私は倉敷で生まれて、子供の頃からそういう民家を普通に見てきた。だから、美観地区にある特別な文化財という意識はない。ちょっと外に出れば、石を投げたら当たるくらい民家がいっぱいある中で、それを「どう残す」というより「どう住み続けていくか」、その方法を考えたということですね。東京の人なんかと話していると思うのは、民家を非日常で考えているということなんです。我々は日常で考えている。そのズレがあるから、話もどうしてもズレてきちゃう。

佐藤：私も古い民家で生まれ育って、今も民家に暮らしている。民家は体の一部のようなものなんです。

榎村：だから特別、何かの衝撃を受けて民家を選んだわけじゃない。建築をやっている、たまたま身の周りに民家という素材が豊富にあった。そこに我々の手法をもってすれば、江戸村のような特殊な状況ではない、もっと活きたものが創り上げていけるんじゃないかと。神家：でも、発足当時は逆風でしたよね(笑)。「若い建築家が、何でそんな古くさいことを」という批判が多かった。古民家再生は、建築家としては非常にネガティブな、創造的ではない仕事だと思われていたんですね。

「壊したくない」という住み手の思いにごまかしや小手先の改造ではなく、根本的な再生という手法で応えたかった。

…古民家再生工房発足の経緯は。

矢吹：もともと、古民家再生工房の前身ともいえる、「文化としての建築を考える建築家の会」というグループを私と榎村君たちで作っていたんです。当時はまだ、テーマとして民家があったわけではなく、メンバーそれぞれが、地域で存在感ある住宅を考えようということで活動していました。建築について意見を交わしたり、実作を見て議論したり、写真展を開いたり。

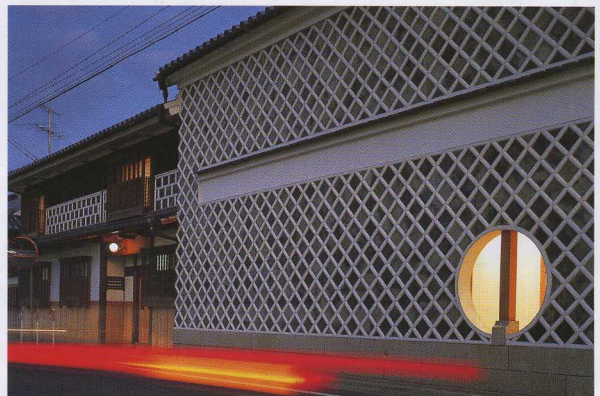
萩原：私が大阪から岡山に帰ってきた時に、ちょうどそのグループができていたんです。で、子どもの頃は野暮ったいとしか思わなかった民家にあらためて触れてみると、建築家としてはやはり見るべきものがあると。民家のもつコスモロジーとかね。じゃあ、一緒にやろうということになって。

榎村：「古民家再生工房」になった直接のきっかけは、1986年に、国際居住年記念のテレビ番組「甦る民家」で、私と矢吹さんが手がけた2軒の再生です。テレビで「古い民家を提供してください」という募集をかけたから、1週間で40～50軒もの申し出があったんですよ。

そこで私と矢吹さんが1軒ずつ見て回ると、どれも立派な家だし、オーナーはみんな「本当は壊したくないんだけど」と言っている。

矢吹：それまでは「古い民家を直したい」というと、工務店や大工が「そんなバカなことをしたら2倍も3倍もカネがかかる、檜普請の新築が建つよ」と言っていたんでしょう。「どうしてもやってくれ」と言えば、プリント合板をベタベタ貼ってごまかすようなことしかやらない。我々が今やっているような、根本的な再生を行うということは、まったく考えになかったんですね。

榎村：そんな状況の中では、我々が一般のニーズに応える窓口としてもっとアピールしていかなければと。そこで「甦る民家」のあと、考えを同じくする6人が集まって、'88年に「古民家再生工房」がスタートしたんです。



いかしの舎・街道に面する長屋門・蔵。蔵は展示室・喫茶コーナーに改造。新たに開けた丸窓からは展示室が見える。

# 再生は建築のひとつの手法だ

我々はデザイン志向がかなり強い。  
古民家再生を建築の一手法として捉え、  
建築としての質を追求している。

萩原：我々は正義の味方でもなんでもない、ただ面白がってやっているというのが強いんですよ。

神家：自然素材を使って、すべて手作りでやっていますからね。いまはそれが価値があるように言われるけど、本当は昔からそういうやり方でずっとやってきたわけ。戦後の近代化の中で工業製品がどんどん出てきて、作り方が違う方向に行っちゃったけど、民家というのは元々がそういうものなんで、特別に自然素材を使おうとか環境を考えて、なんて意識はあまりないんです。

植村：そういう意識はないんだけど、我々はデザイン志向がかなり強くて、「再生」を建築の設計上のひとつの手法として確立させたいという思いは強い。

神家：植村さん、いつも言っていますよね。「結果として保存に繋がれば一番いい」って。

植村：そう。こちらが「あなたの家は古いからいいですよ、残さないさよ」と言うのは大きなお世話だと思う。我々の仕事を見た人が、自分の古い民家もこんなふうにして住みたいと思えば、結果として残っていくんじゃないでしょうか。

萩原：テキストとしての価値があろうとなかろうとね。そこに暮らす人が民家を壊すのが惜しいと思ったら、その欲求に応えるのが建築家の役割だと思いますね。さっき創造的な仕事ではないって話が出ましたが、オリジナリティに対する考え方だと思うんですよ。西洋的にはオリジナリティって、個人の所有物で

サロン・ド・ファンホー  
江戸期の武家庄屋の母屋をギャラリーに再生。広い土間の上に広がる、闇に包まれた空間にトップライトからの光が、迫力ある構造を浮かびあがらせる。

**保存や修復が目的じゃない。  
ましてや正義の味方でも何でもない。  
ただ面白がってやっている、それが一番。**

…最近では古民家再生がブームのようにもなっていますか？

植村：実は、そこが我々の大きなジレンマ、フラストレーションになっています。非常に誤解をされやすいんですが、我々は保存や修復を目的にスタートしたわけではないし、木の温もりがどうとかいうクサイ意識もまったくない。それに、いま世間で騒がれていること、たとえばリサイクルもサステナブルもシックハウスもエコロジーも、おそらく我々がやっていることは全部当てはまると思うんです。でも、そんな意識は全然ない(笑)。

# Point

いかしの舎・母屋  
もとは和室や台所があった場所を床や壁を取り払ってつくった吹抜けのある土間ホール。





地方でやるとどうしても刺激が少ないですから、そういう悪口の言い合いが必要になる(笑)。

矢吹：東京の方なんか取材に来て言われるのは、いろんな建築家がいるけれども、こんなに早くレベルが上がっていった人たちは珍しいと。それはやはり、机上の空論じゃなくて、それぞれの実作をもとに6人が集まって好きなことを言い合う、その繰り返しの結果だと思っんです。

植村：我々はずっと、ベースになるノウハウはどんどん公開して、共有していこうという考え方でやってきた。個性はあとから自然に出てくるんだから、そこでノウハウを出し惜しんでも仕方ない。

神家：たとえば、誰かが弁柄漆喰を塗った



▲長時間にわたって活発な建築談義が続いた。左から神家氏、植村氏、佐藤氏、萩原氏、矢吹氏、大角氏。

◀西阿知の家  
母屋と蔵をつなぐ土間と玄関ホール。繋ぎ部分は吹抜とし、屋根は全面にガラスをはめ、下の土間まで光を入れる。

あって他人とは共有できないという考え方なんだけど、我々の中ではそんなことはない、と。たとえば日本の「うつし」とか「本歌取り」のように、先達をつくったものに対して自分の解釈を加えて、より新鮮ないものをつくろうというような、日本独特の考え方がある。古民家再生はそういうこととつながっていて、古いものの中に新しい意味での創造性を加えるんだ、という気持ちが強い。

植村：それが最近の古民家再生ブームとかで、一般の雑誌のなかでも、田舎の囲炉裏に串刺して食ってる人間と一緒に出てしまう。再生と民芸がごちゃまぜなんです。そういう意味で非常にストレスを感じることはある。それが分かってもらえるまでつくり続けるしかないか、という気持ちもありますね。

**個性は後から自然に出てくるもの。  
基になるノウハウを公開・共有しながら  
議論を重ねることでレベルが上がった。**

…6人で活動することの意義については？

矢吹：これもよく誤解されるんですが、我々はいつも6人で活動しているわけではないんですよ。6人一緒に手がけたのは、「いかしの舎」だけ。

神家：一人ひとりが自分の建築事務所を構えていますから、普段は別々に活動しています。再生だけでなく新築もやっていますね。それで月に1度は定例会を開いて、情報交換したり、建築論を戦わせたり。

植村：メンバーの誰かが何か建てた時も、皆でワーッと見に行っ好きなことを言います。かなりキツイこともね。

のを見ると、その調合比が何対何ということまでわかるわけです。それが良かったら真似をするんだけど、それ以上のいいものにしないとボロカスと言われる(笑)。じゃあ1割ほど比率を変えてみたらどうなるかとか、そんなことを一生懸命やってきたから、ノウハウの積み重ねもできたと、レベル上がるのも早かったんでしょ。

萩原：僕は学生の時に先生から「つまらんオリジナルより、すばらしいコピーのほうがいい」という話を聞いてすごくショックを受けたんですよ。それからいろいろ考えていると、日本の職人の技術とかが高いのは、やっぱり「わしが、わしが」じゃなしに、同じ土壌のなかで淘汰されつつ、いいものが継承されていくシステムができていたんじゃないかと。そういう意味でも、作品を公表して批判しあったり、いいものを共有したり、つまり一度使ったものは誰が使ってもいいと、自分だけの専売特許ではないんだという考え方が6人のなかにあるんですよ。



加須山の納屋  
再生では既存の耐力壁の量を減らすことなく開口部を設けられる天窓による採光が有効。新設の間仕切壁は梁間方向の耐力壁としても働く。

# 6人6様のボキャブラリーがある

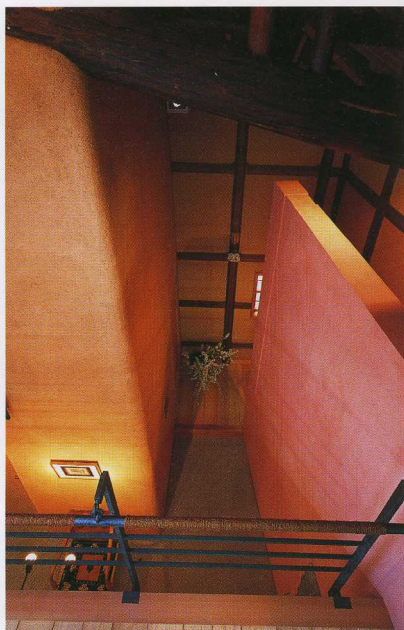
異物との対比、新旧の対比。

調和ではなく「対比」をめざすことで  
民家の新しい魅力を引き出す。

**あくまでも民家をベースに、  
いかに民家的でない要素を加えるか。  
そこに6人の個性が出てくる。**

…古民家再生のおもしろさとは？

矢吹：単なる復元にとどまらず、また、暗い、寒い、不便だという欠点を解消するだけではなく、新しい要素を加えることで民家が本来持っている魅力を引き出していく。つまり、民家的ではない異物みたいなものを入れて、



創想舎

江戸期の藍染め納屋の再生。ホール吹抜けにジャイアントファニチャーのようにしつらえられたイスラムの土の塔、ヨーロッパのスタッコ壁を、日本の民家の外郭が包む。モダンさと色気を演出する。

て、いかに新しさを出すか、ということです。もちろん建具にしろ格子にしろ、基本的な民家のボキャブラリーというものにはたくさんあるわけで、それを自分のなかで選別して、解釈し直して使っていく。それでも足りないから異物を入れる、ということになるんですけどね。

萩原：異物といってもいろいろあるんです。寺社建築とか城郭、あるいは数寄屋のような日本の建築のなかにもあるし、矢吹さんはヨーロッパの建築から持ってくる。榎村君が意識的に取り入れているのは、エスニックなもの、東南アジアとか東洋の、いわゆるヴァナキュラー（土着的）なもの。つまり民家的で

ないものはたくさんあって、それをどう入れ込むかは個人の差になってくる。

榎村：ここ（榎村氏の事務所）は江戸時代の藍染めの納屋を再生したものでありますが、モロッコで見たイスラムのカスパルにある土の塔や、イタリアンスタッコのピンクの壁を挿入しています。どちらかというとき我々は、ヨーロッパの石造りの建築なんかに憧れていた部分があって、そっちの方を参考にすることが多い。矢吹さんはミラノにも留学していましたね。我々の建物を見た人が「色気がある」「艶がある」とよく言うのは、そういった装飾的なものをあ

る程度思い切っているからでしょう。それは民家というものを、保存とか修復とかのレベルで後生大事に考えているとなかなかできない。だから「民家を食べ物にして…」とか悪く言われるんだけど、一生懸命考えてやっけてはいるんです。ただ、その一番もとのところで割り切っている部分がある。

大角：割り切っている部分はあるんだけど、その反面、きちっとしたところはきちっとしたいと思っているんです。おそらく、伝統的なことをやっている人と比べても、遜色ないくらいの知識は持っていると思う。でも、それは持っていて当たり前だと思うんですよ。我々は、さらにその先を行こうとしているわけだから。

…異物を入れるというのは、違う空間性を民家のなかに入れる、ということ？そこで調和のようなものはどう考えて？

榎村：違う空間性というより、もともとの民家の空間性というのがあって、異物を入れることによってそれが刺激されて、新しいかたちとして出てくるってことかな。だからあくまでもベースは民家。そういう民家的な要素から一生懸命掘り出して、その意味を転移させて仕掛けていく場合もある。それは結構慎重に、いろいろやるわけです。つまり、民家の骨組みや空間構造があって、それに仕掛けていくことで新しい何かを生み出したい、と。その仕掛け方が6人それぞれで違ってくるわけですね。

萩原：違うといっても、おのずと不文律のようなものがある。新鮮味を出すためにいろんなことをやってもいいんだけど、ここまではやらんというのがある。

榎村：さっきの矢吹さんの話でもあったけど、異物を入れるときに、屁理屈でも何でもとにかく筋が通っていないとまずい。ただ、それさえクリアしていればトライは自由にしたらいいと。

萩原：そう。それで成功すればみんながやりだす。失敗したらやらない（笑）。そういう公開性が6人のなかにありますからね。

榎村：入れるものもいいか悪いかは、集まったときによく議論します。そして入れながら、いいか悪いか確認しながらやっていく。

神家：そのとき、我々は決して「調和」を目指してないですよ。いつも「対比」を頭に置いている。

萩原：調和とかプロポーションとかが第一義ではないんです。古いものに新しいものを付け加える、その後



で次の世代がまた付け加えるということを考えていくと、そういうことにこだわってもしようがないだろう、と。それを態度として出すというのが、再生の手法における一つの原則的な考え方です。

神家：建築というものに完成はない。常につくり続けられているものだから。

## 新旧の対比による「時間の視覚化」、二重構造や入れ子構造で生まれる「再生のサーキュレーション」。

…再生を手がけることで得られた発見やテーマがあれば。

萩原：再生をやって初めて気づいたんですけど、時間と空間があってこの世界が成り立っているんですよ。プロポーシオンとかフォルム以外の視点があるというのが、僕自身非常に大きな発見だったんです。そういう、時間の流れのなかで設計するというのを大切にしたい。

神家：新旧の対比による「時間の視覚化」ですよ。新しい素材と古い素材を対比的に扱うことで、過去と現在の時間の距離をはっきりと認識させる。この2つの時間の共振によって、より新鮮な空間が生まれるんじゃないかと。これがなかなか難しく、たとえば古い民家にステンレスやアルミを入れると、対比は際立つけれども、あまりにも乖離すぎて陳腐なものになる。かといって、民家のポキャブラリーだけでつくると、予定調和的になって時間の距離がはっきりとしない。

梶村：対比の問題を扱うとき、民家のなかにガラス箱でもつくって斜めに突っ込むとか、そんなことはすぐにできる。雑誌に発表しても文章にしやすいし、非常にわかりやすい。だけど、それはやっちゃだめだというのが我々の暗黙の了解なんです。なぜかといえば、質感や時間の問題を考えたときにもたないだろう、と。コンセプトの仕掛けが時間的に耐えられないだろうというのが。だからテクスチャーとか色とか、同じようなことをしつこく繰り返しながらやっている部分があると思います。

それが外から見たら「今どきのものじゃない」ってことになるのかもしれないけど。

萩原：最近、私がこだわっているのは、古い部屋の中に新しい部屋をつくるという「入れ子構造」ですよ。これは、新旧の対比による時間の視覚化としては非常に有効だと思います。しかも反復性、永続性がある。たとえば古い座敷を基礎ごと残して、周りに新しい部屋をつくるとします。そして次は、周りの部屋を残して座敷を新築する。さらにその次

は…というように、内と外が互いに入れ替わりながら更新を繰り返していく。これぞ、入れ子構造がもたらす「再生のサーキュレーション」だと私は思っているんですけど。その意味では伊勢神宮の式年遷宮も、再生のひとつのバリエーションですよ。

矢吹：僕も入れ子構造や二重構造はよく使いますね。部屋の中に小さな部屋をつくと、上部にあまりの空間ができる。その丸太梁や草葺の小屋裏なんかは、隠すより見せるほうが絶対におもしろい。

…入れ子や二重構造にする場合も含め、やはり柱や梁といった構造は大前提？手を加えたとしたら、そこには何か決まりのようなものが？

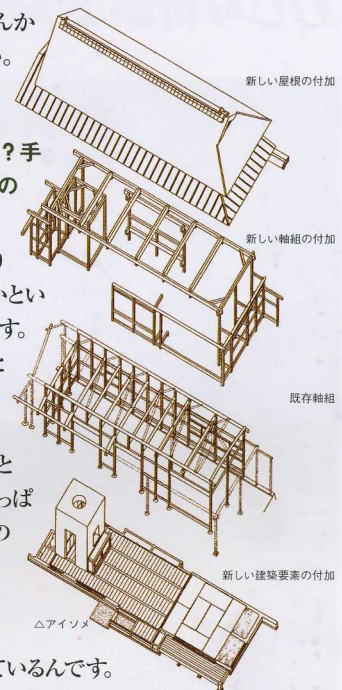
梶村：私の場合だと、組み替えたり抜いたりすることもあります。でも、意識していないかといえばそうではなくて、やっぱり構造ありきです。今までの経験でいうと、たとえば小屋組はともきれいだけど、柱は全部腐っているようなケース。そんなときに柱を全部新しくして、小屋組だけ残して新しい柱の上に載せるとね、笑っちゃうようなものになるんですよ。やっぱり再生の場合、梁も柱も含めた全体としての感覚がきちっと残らないといけない。

萩原：古いものと新しいものの対比を目指すということですが、構造を古いものとして隠す、あるいは消すことはできない、と考えているんです。構造をなくしたら、新しいものを入れても対比にならない。

梶村：構造をさわる場合、もちろん木という素材の太い梁や柱で強度をもたせるのが一番いいんですが、経済的な問題なんかで現実としては無理な場合もある。だから鉄骨で補強することもあります。その場合は、鉄骨をいかにそぐわすか、いかに対比して見せるかというのが、また次のテーマになっていくわけです。

大角：構造に手を加えるときの判断基準は、簡単に言ってしまうと経験でしかないでしょうね。柱を入れるとか補強するとかいうのも経験的な判断であって、技術的にどうか数値的にどうこうというのは、ある意味、僕たちに不足している点かもしれない。

梶村：もちろん、前の建物より強くするというのは大前提ですよ、お金をかける以上はね。ただ、こういう場合はこうすればいいというような確固たるものはない。木造の場合、そういう研究自体が遅れていますし、建築基準法が日本の伝統的な工法をまったく否定している状況がある。そんななかで民家を手がけていると、経験でしかないなかなか判断できないわけです。さっき言ったように、経済的な問題も大きい。限りあるお金のなかで最善の方法は何か、という。



▲五島の納屋  
納屋を居住空間として再生するには様々な新しい建築要素の付加が必要。土間に床を張り、周囲に、玄関、濡れ縁、和室の床の間や吊り押入、出窓と地袋、便所などを配置する。劣化したサス構造の草葺き屋根は撤去して垂木構造の鉄板葺き屋根を架ける。さらに、一坪の厨房を納めた入れ子の漆喰塗りキューブを挿入する。

◀庄原の家  
茅葺の屋根裏部屋、分厚い茅の屋根に天窗をあけて、風と光をとり入れる。



よる時間の視覚化としては非常に有効だと思います。しかも反復性、永続性がある。たとえば古い座敷を基礎ごと残して、周りに新しい部屋をつくるとします。そして次は、周りの部屋を残して座敷を新築する。さらにその次

# 不合理を楽しむという美学

新築のように合理的にはいかない。  
それを逆手にとれば、  
むしろ新築よりチャレンジができる。

**古民家の様式と現代建築、  
そのどちらにも偏りたくない。  
境界線の「キワモノ」でありたい。**

…昔と今で方法論の変化というの？

矢吹：民家を手がけ始めた最初の頃は、民家のポキヤブラリーを何でもかんでも組み合わせさせて使っていたし、誰の作品も似たり寄つたりの印象が否めなかった。それが最近になって少しずつ、各自の個性や方法論の違い

が出てくるようになりましたよね。メンバーそれぞれがひと皮むけたというか。

大角：昔、「民家はやさしい」と思っていた時期があったんですよ。民家の真似的なことはそんなに難しくないと。たとえば格子をつけたり、弁柄を塗ったりすれば、それなりに格好がつく。でも、その次元で終わるわけにはいかない。次のステップに行こうとすると試行錯誤が生まれる。だからやっぱり「民家はむずかしい」(笑)

萩原：民家はすでに伝統的な形式が確立されているから、そこに現実の要求を当ては

めていくだけで、破綻のない、ある一定レベルのものはでき上がるんですよ。そういう意味ではやさしい。

佐藤：そういえば、格子を付けまくっていた時期がありましたよね。

神家：付ければ安心、という(笑)

植村：結局、古民家の様式をイメージとして扱うことの危

険性なんですよ。格子ばかり使うと確かにカッコよくなるんだけど、これが実は格子がもっている密度の力によるところがあって、どこまでが自分の力か、どこまでが格子の力かわからなくなってくる。それは常に問題として意識しているから、いろんなことをしつこくしつこくやっている。それで最終的に僕が思うのは、我々のやっている再生の魅力は、やっぱり「キワモノ」だろうと。古民家の様式と現代建築の境界線、そのキワのところに居られるかどうか。どっちかにどっぷり偏るとまずい部分があって、格子だらけにすると民家で十把ひとからげにされるし、現代性を出そうとして安易にステンレスとガラスの箱を入れると現代建築のほうへいってしまう。でも、それじゃあないと。キワのところで何か新しいものが出来たときに初めておもしろさが生まれるのであって、しょせんキワモノのおもしろさかな、という(笑)。

…プランニングの際、施主さんの要望との折り合いはどうやって？

佐藤：お施主さんから一番出てくる要望は「とにかく明るくしてください」ですよ、やっぱり。

神家：古民家のなかで、採光、あと通風の問題は大きいですよ。かといって、どこもかしこものっぺり明るい空間にはしたくないから、僕はトップライトを使ったりするんだけど。

植村：他は、あまり強い要望は出てこないんじゃないですか。「新築じゃなくて再生だから…」と、施主さんにも一種のあきらめのようなものがある(笑)。だから、むしろ新築よりもチャレンジができる。

矢吹：でも、新築のプランニングのように合理的にはいかない。いろんな不合理が生じますよね。再生にはそれを逆によしとするような、不合理の面白さがあると思うんです。

神家：最近、屋根裏部屋を設計したんですよ。天井が低い、立って歩けないような空間で、新築ならそんな不合理な部屋をつくるのは難しいんですが、これが隠れ家のように居心地がいい。再生では既存の建物に制約を受けて、すべてを合理的に解決できないところが出てきますが、それを逆手にとって不合理の面白さを楽しんでいますね。

矢吹：「不合理の美学」ね。

神家：たとえば俳句や短歌のように、決められた字数のなかで大きな宇宙を表現しようというのがありますよね。僕は再生って、それに似ていると思うんです。決まった枠のなかで、それを乗り越えたもって自由な表現を獲得したい、と。再生にしかできない自由な表現の仕方、そういうものがきっとあるだろうと思う。



松江の蔵  
階段室を兼ねたサンルーム。全面ガラス屋根の下に、割竹のルーバーをとりつけ、やわらかい光を入れる。



# 若い人にも本物を作ってもらいたい

# Message

後進の若い人が再々生したくなる、  
30年後も注目される民家をつくる。  
それが我々の最低の義務だと思う。

再生でも、自分のセンスやアイデアは  
充分盛り込める。通過点としてでもいい、  
一度やってみる価値がある、と言いたい。

…若手の建築家へのメッセージを。

佐藤：私がかつて専門学校で非常勤講師をしていたころ、古民家を住宅や店舗に再生するという課題を出したことがあるんです。でも、興味をもつのは40人中、1人か2人だった。若い人の意識の中に古民家はないんですね。そういうのは美観地区にある特別なものと思っていて、住む家としては捉えていない。そのことを感じて非常に寂しくなりましたよ。

神家：確かに我々が展覧会を開いても、岡山の若い建築家たちは見に来ませんよね。

萩原：若い人たちの頭の中には固定された民家のイメージがあって、そこに自分の創作意欲が入る余地はないと思っているんじゃないですか。実際やってみると、意外に自分のセンスや考えが盛り込めることがわかるんですがねえ。

榎村：一生やるかどうかは別にして、自分の通過点としてでもいい、民家再生という仕事には、一度やってみる価値がある、と言いたいです。

矢吹：僕も日頃から若い人に、民家を勉強しろと口が酸っぱくなるほど言っているんです。地方で建築をやる以上は、東京のほうばかり向いていても駄目だ、地方には地方の建築がある、そのひとつが民家なんだと。民家という幅が狭いように思えるけれど、実は奥が深く、自分で一番興味もてるテーマを探してやればいいんだと。でも、いくら口で言ってもどうなるものでもないんですね。やっぱり自分の目で見て、本当にそうだなと思わないと駄目でしょう。

萩原：民家は実物を体感しなければ頭に入ってきませんよね。

神家：民家に限らず、情報は自分の足でつかむこと。雑誌でも、昔は白黒だったものが今はカラー写真で見られるけれど、それは実物とは全然違う。僕らは昔、月に1度集まって「実測」をやっていたんですよ。民家を1軒1軒見て回って、部材のサイズやプロポーションを測るという作業を何年か続けた。自分の足で情報を稼いでいた時代があった。それが今、非常に役に立っていると思いますから。



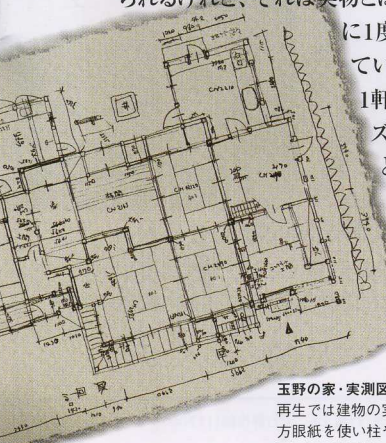
黒谷の家  
山の斜面に建つ納屋の再生。もともと堆肥場だった場所を屋根、壁にガラスを多用し開放的な空間として甦えらす。

矢吹：そう、わからないことがあれば、すぐ近くの実物を見に行けばいいんです。

佐藤：若い人にも本物を作ってもらいたいですね。50年、100年先に、壊されるのではなく、再生されるような本物を。

萩原：我々が再生した建物を、我々が30年後に再々生することはできませんが、後進にその役割を託したい。そのためにも、30年後にも一定の魅力が残っていて、ふたたび再生したくなるような物を作ることが、我々の最低の義務だと思っています。

工場の発足から15年、6人の平均年齢は55歳になった。しかし、メンバーはマンネリにならないように、さらにレベルアップできるようにと、常に各自がテーマをもって新しい試みに取り組んでいる。古民家再生がブームになる遙か以前から再生に取り組んできたメンバーたちは、そんなブームからは距離を置いたところで再生を続けている。淡々としているようにも見えるが、そこには明確な方法論があり、ボキャブラリーがあった。そして、メンバーの誰もが、さらに確かな方法論の確立をめざし、再生が建築設計の重要な分野として認識されることを切望している。「これからも作りつづけるしかないんでしょうね」、そんな言葉が印象的だった。



玉野の家・実測図  
再生では建物の実測調査は重要な仕事となる。方眼紙を使い柱や梁の傷みぐあいを調べながら、平面図、断面図、構造図などを書く。

# 再生と光 再生に採り入れる光と風

どの古民家にもある、暗い・寒いという問題。再生にあたっては、現代の生活に必要な明るさの確保と、すきま風を防いで快適性を高めることが重要となってくる。そこで古民家再生における、光と風の採り入れ方について訊いてみた。

## 児島の家 ▶

母屋、北側の下屋を再生した茶の間と居間、天井は下屋裏表わしとしトップライトを設ける。

## 瀬戸の家 ▼

江戸末期に建てられた民家の再生。小屋裏物置を子供室として再生。北側にルーフトウインドウを設け採光と通風を確保。

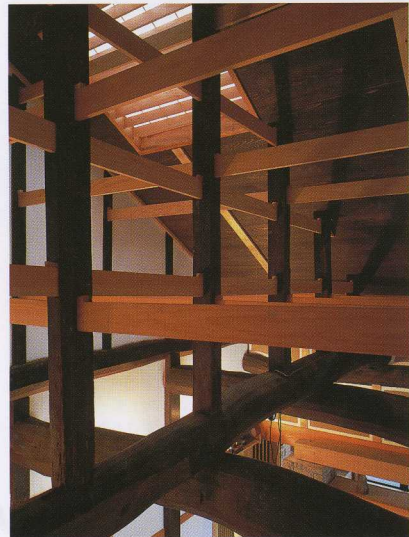


## 明石の家 ▶

天井を取り払って小屋組みを見せた2階ホール。階段上部に設けたトップライトからの光が1階に落ちる。

## 明石の家・小屋組 ▼

木製ルーバーを付けたトップライトからのやわらかな光が小屋組を照らす。傷みの激しかった小屋組は新しい材に入れ替えている。



## 民家にはシンプルな光が似合う

…施主さんの要望として多いのは、やはり「暗さの解消」ですか。

榎村：そうですね。今の日本の家は、何でもかんでも明るくしてほしいと、それがモダンだという志向がある。神家：新築はもちろん、古民家の場合も「明るくしたい」というのが、施主さんが再生を考える一番の動機にな

っていますね。とくに居間を明るくしてほしいと。その場合、光を採り入れる手段としてよく使うのはトップライトです。非常にシンプルな光が入ってくるので。

佐藤：昔の民家は母屋があって下屋があって、下屋空間が生活の場になるんですが、そこはどうしても暗いんですよ。屋根の構造はそうそう変えられませんが、

光を採り入れるにはトップライトしかないんです。前に私が手がけた物件では、トップライトを6カ所取りました。が、効果的に明るくなって施主さんから喜ばれました。

## 自然の風を通して建物を呼吸させる

…採光のほかに、通風についてはどうでしょうか。

萩原：居室として使う部屋だと、やはり光だけではなくて換気も必要になりますね。

佐藤：トップライトを6カ所付けたさっきの物件では、開閉式のトップライトを採用して風も採り入れるようにしたんです。風が通るといのは、人間の五感的なものすごく気持ちがいい。

矢吹：草葺きの屋根裏に部屋を作ったときには窓が取れない。でも光が必要だし、風を抜く機能も必要になる。そこでそういう開閉式のトップライトを使うんですが、光だけではなくに、空気をてっぺんで抜いてやるのは

非常に効果的だと思いますね。神家：こもった空気が必然的に上に行って、常に新しい空気が導入されますから、高い所に窓があって、それが開くというのは非常にいいと思う。自然に風を呼び込むというか、建物が呼吸するための「生きた窓」になる。矢吹：居室として使う空間ではなくて、風が抜ける必要のない場合は「卯建（うだつ）」の天窓にすることもあります。屋根に箱棟のようなものを作り、棟のところにガラスを置いて光を入れるんです。



## 民家には闇の空間の魅力がある

…古民家における理想的な光のあり方とは？

大角：昔は僕も、家の中は全体的に明るいほうがいいと思っていましたが、最近はそうでもない気がしてきて。たとえば、小屋裏まで明るくする必要はあるのかどうか。

神家：僕の希望としては、小屋裏は暗めに作りたいんです。物事を考えたりするには、少し暗めの部屋のほうが落ち着いてゆっくりできる。あるいは好きな友達とお酒を飲んだり、昼寝をしたり、そういう隠れ家的な空間として活用できる小屋裏を作りたいなというも思うんですが、施主さんからはなかなかそういう要望が出てきません。小屋裏はせいぜい物置として使うくらいという…。確かに昔から、小屋裏のようなところは闇の空間として残しておくほうがいいという考え方がありますよね。昔の民家の蔵や小屋裏には、「物の怪(もののけ)」が住んでいるという一種の畏(おそ)れがあって、それによって家の中に奥行きが生まれていた。だから、何にも利用しない闇の空間を残すのは、一方では大切だと思いつながりながら、そういうところをうまく利用して、心地よい空間をつくりたいという建築家としての希望もあるわけです。



## 構造を照らす光、心理面に働きかける光

…事例としてはどんな試みを？

植村：神家君が言ったような、闇の空間を意識させるために、部分的に光の筋を入れて梁を浮かび上がらせたりするのは民家ならではの手法だと思います。

萩原：そうですね。建物内部の構造を印象づけるために光を採り入れる、そんな手法があるということ、いみじくも古民家が我々に教えてくれたんです。たとえば煙出しの穴から光が洩れていることによって、高いところの小屋組が見えるのが面白かったり。新築の物件を手がけた時、吹き抜けに小屋貫を使った小屋組をトップライトで照らしたことがありました。これは古民家から学んだことを新築に活かしたものです。

神家：以前に窓がひとつもない納屋を解体した時、瓦を全部取った状態で中を見ると、野地板の隙間や小さな節穴から無数に光が洩れていたのが非常に印象に残っているんです。そんなイメージで、トップライトの下に光をやわらげるための障子を付けたこともあります。

矢吹：我々がよくやる二重構造や入れ子構造では、部屋の中に部屋を作るわけですから、中の部屋の天井をガラスや波板にする場合があります。そうすると外の部屋に光が入って、さらに中の部屋にやわらかく入る。そんな時、上にトップライトを付けると面白くなりますね。

神家：僕の事務所にもトップライトを付けているんですが、帰る時にブラインドを降ろして電気を消すと、月明かりがさーっと入ってくることもあるんですよ。それで、ああ満月が近いんだなと感じたりもします。

萩原：そういう心理面への影響を考えると、光は重要な要素ですね。だから再生でも新築でも、手元が明るいか暗いかという、実利面以外での光の採り入れ方を考えるのも、我々の仕事のひとつだと思えます。

植村：構造を照らす光や、心理面に働きかける光のことも考えていくと、どんどん可能性が広がっていくでしょうね。



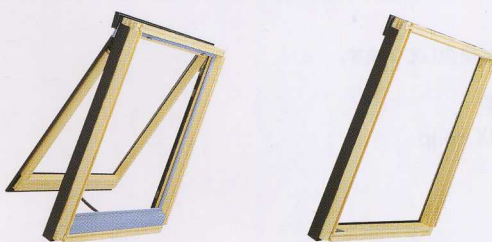
出石の家(上)  
小屋裏につくった、立って歩けないほど天井の低い隠れ家的な部屋。トップライトによって採光、通風を確保している。

三原の家(中)  
もとの母屋の古材を使っての新築住宅。2階からつづく小屋裏空間。子供室として使用。

伊丹の家(右)  
天窓は直下の部屋への採光にとどまらず、中置梁、小屋梁、小屋貫などの小屋組の構造を印象づけるのにも役立つ。



### スカイビューシリーズ



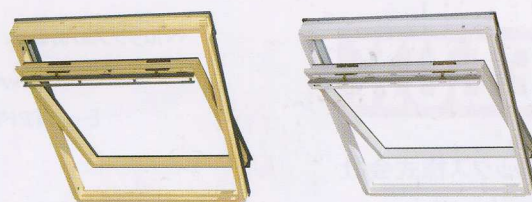
#### VS 【押し出し式開閉型】

- 便利な電動機能
- タイマー付きリモコン
- 吹き込みセンサー
- 網戸を標準装備
- 配線工事が簡単

#### FS 【フィックス型】

- 優れたコストパフォーマンス
- 採光を重視したベーシックタイプ

### ルーフウィンドウリーズ



#### GGL 【中軸回転式開閉型】

- 閉めきり換気
- 選べるブラインドバリエーション
- 180度回転サッシ

#### GGU 【中軸回転式開閉型】

- 白枠タイプ
- 浴室に最適
- 閉めきり換気
- 180度回転サッシ

## Light & shadow in a traditional Japanese House



### KOMINKA-SAISEI-KOBO

member Yuzo Osumi  
Akio Kamiya  
Takashi Sato  
Toru Naramura  
Yoshiro Hagiwara  
Akiyoshi Yabuki

**VELUX®**

ベルルクスの情報は、インターネットでも提供しています。

[www.VELUX.co.jp](http://www.VELUX.co.jp)

E-mailアドレス: [info@VELUX.co.jp](mailto:info@VELUX.co.jp)

#### 日本ベルルクス株式会社

本社  
〒151-0051 東京都渋谷区  
千駄ヶ谷1-23-14  
ベニーリーフビル  
Tel:03-3478-8141 (代)  
Fax:03-3478-8147

札幌  
〒003-0024 札幌市白石区  
本郷通7南3-15  
シティスカイコート2F  
Tel:011-864-4761 (代)  
Fax:011-864-4760

仙台  
〒981-3133 仙台市泉区  
泉中央1-34-6  
アルファートムビル3F  
Tel:022-373-8831 (代)  
Fax:022-373-8854

名古屋  
〒465-0095 名古屋市名東区  
高社1-266  
ラウンドスポットー社4F  
Tel:052-773-3517 (代)  
Fax:052-773-3572

大阪  
〒532-0011 大阪市淀川区  
西中島4-6-24  
大拓ビル9 2F  
Tel:06-6300-5036 (代)  
Fax:06-6300-5206